

て居ることゝ考へる。南北朝時代から後には明かに康國の人が支那に来て通商し、支那領トルキスタンやアルタイ地方にかけても、其の植民地のあつたことは、今日明かに知られて居る。^②支那の史書に康國の名が見えるやうに成つてから後、外國人で康姓を冠せられて居るものが、康國の人なるを示すものであることは、一般に認められて居ることで、疑ふべき餘地は無い。

明かに康國の人と認めらるゝもので、漠北の歴史に關係の記事を残して居るのは、突厥の時に始まるやうである。突厥は其の興起の時から間も無く勢力をソグディアナ地方に及ぼして居つたものであることは、兩唐書の突厥傳や漠北に存する闕特勤碑文などを研究して見れば解る。それで突厥の東部、即ち今の外蒙古の地方にも自然に康國人の入り込んだものであらうといふ想像は、此の情勢からも推察し得る所であるが、舊唐書突厥傳貞觀三年の記事中に、頡利可汗の事を記して、「頡利每委任諸胡、疎遠族類、胡人冒沓、性多翻覆、以故法令滋彰、兵革歲動、國人患之、諸部攜貳」と記し、新唐書には同傳貞觀二年の記事中に、同様の意味を記して居る。唐書に胡といふ語は其の指す所極めて曖昧で、突厥をも此の語で呼ぶ例證は多いが、康國人がまた普通に此の稱で呼ばれて居ることは、好く人の知る所である。舊唐書突厥傳に、可汗思摩を傳した處によると、「思摩者頡利族人也、始畢・處羅以其貌似胡人不類突厥、疑非阿史那族類、故歷處羅・頡利、常爲夾畢特勒、終不得典兵爲設」と見え、新唐書同傳にも同じ意味が記されて居る。之に據れば茲に胡といふものは、突厥即ちトルコ族とは甚だ異つた容貌を有したものであつた事を知るに難くない。さて頡利が政を委ねた胡といふのは、文中に記す所からも推し得る如く、勿論突厥及び